

平成14年度モラロジー研究発表会（柏会場、一月二五日）で、「コモンモラリティとしての最高道徳」の主題について以下の全体討論会を開催しました。この記事は全体討論の報告です。なお、討論の内容をできるだけ正確に伝えるために、繰り返し表現、話し言葉を適切な表現に修正した箇所が一部ありますので、あらかじめご了承ください。

平成一四年度モラロジー研究発表会（柏会場、一月二五日）で、「コモンモラリティとしての最高道徳」の主題について以下の全体討論会を開催しました。この記事は全体討論の報告です。なお、討論の内容をできるだけ正確に伝えるために、繰り返し表現、話し言葉を適切な表現に修正した箇所が一部ありますので、あらかじめご了承ください。

鈴木（司会）：「コモンモラリティとしての最高道徳」ということをテーマにしまして、全体で討論をするという時間を持ちたいと思います。

まず、コモンモラリティにつきましては、いろいろなとらえ方があるように思います。そこで、ここでの課題は、コモンモラリティとは何なのかをできるだけきちんとおさえること、そしてコモンモラリティと最高道徳はどういう関係にあるのかを明らかにすることだと思えます。先ほどフロアからも、「コモンモラリティとしての最高道徳」なのか、「コモンモラリティと最高道徳なのか」という質問が出ていたかと思えます。このような問題について、この六十分ちよつとの時間で少し

でも明らかにできれば有り難いと思います。

最初に、前に出ていただきました五名の発表者の方に、一人二分ずつお願いしてありますが、コモンモラリティを簡潔に言っただけのように捉えているのか、そのコモンモラリティと最高道德の関係をどのように捉えているのかについて一言ずつ発言していただき、その後フロアの皆さんに質問していただく時間をとりたいと思います。

それでは発表された順に、永安パネリストの方からお願ひしたいと思います。

永安・私は、コモンモラリティとは人類全体が出会う、あるいは人類全体でなくても人類のうちいくつかのグループが出会う、特に文化を超えて出会う、ひとつの文化の内部ではなくて、ひとつの文化を超えて出会うと、そういう時にそこに開けてくるものだと考えます。例えば昔、朝鮮半島と日本が日韓併合によってひとつの国であったという頃には、朝鮮の文化と日本の文化、朝鮮の文化と大和の文化というのは違いがあらがらそこで出会いました。古い時代にさかのほれば、聖徳太子の頃は朝鮮語を通訳なしに理解できた人がいっぱいいたということが言われます。

それはそれとして、そのように違ったものが出会った時にそこに自ずからある程度同じような考え方とか、同じような価値観というようなものができてくる。要するに、「共通」とは、違うものを円で表しますと、複数の円の重なったところだと考えます。そういうふうに理解しております。

そして、それに世界の諸聖人の言行に見られるような高い水準のものと、我々普通の人間の考えるようなものがあり、価値の高い低いで言いますと、最高道德は価値の高いところのものと考えていいのではないかと、ですから、コモンモラリティといっても、低い価値のものと高い価値を目指すものと、両方あるのではないかと思います。

鈴木（司会）：有難うございました。それでは梅田パネリスト、お願ひします。

梅田・コモンモラリティに関連して問題提起として二点お話ししたいと思います。本日のパネリストの永安研究主幹にはいつも研究上の刺激を与えていただいているのですが、今日はちょっとかみついてよろしいでしょうか。

昨年夏の国際会議の時もそうでしたし、今回のコモンモラリティについてもそうですが、私の印象としては、非常に分析的すぎると思います。分析というのは、何か目的があつて、そのための手段です。例えばコモンモラリティというのは、明らかに概念でして、ひとつの器です。その中に何を入れるかということが問題で、何が入っているのか、まだ合意がないわけです。

私がお話ししました国連の「グローバル・コンパクト」<sup>(注1)</sup>というのもひとつの概念には違いないのですが、ひとつの運動として進み始めているわけです。ひとつの宗教と考へてもいいでしょう。そこに参加している私は、その御用学者といつてもいいかも知れません。我々がケース・スタディ調査のために、企業に行つてインパクトを与えているわけです。本来、学者はそういうことをしてはい

けないのです。今までの研究者というのは中立的であって、研究対象にインパクトを与えてはいけません。心理学なんかはまさにそうなのではないかと思いますが、我々はある程度インパクトを与える存在になって、「グローバル・コンパクト」という運動を展開し広めていこうとしているわけです。

最高道徳も同じだと思うのです。最高道徳というのは単なる概念ではなくて、中身があつてメッセージがあつて、それをいろんな世界に広めようとしている。言い換えれば、布及活動をしている訳です。そういう意味でコンテンツとかメッセージ性がなければ、コモンモラリティという言葉も意味がないということを上げたい。

もう一点は、最高道徳が普遍的であり、学問としてのモラロジーが普遍的であるというのは、我々の団体の主張であつて、日本でも世界でもそれがどの程度受け入れられるかというところが問題だと思えます。受け入れられれば、その範囲で普遍性というものが確立するということでしょう。従つてこちらが一方的に主張しているだけではなくて、相手や第三者に受け入れられるように努力しなければいけませんし、説明しなければいけない。そういう問題だと思えます。

一方で注意しなければいけないのは、ひよつとしたらさまざまな宗教の中にも、我々と同じような考えを持つ人がいて、それを違った言葉で表現しているのかもしれないということです。時々我々は、同じ神を違った呼び名で呼んでいるにすぎないのではないかと、言われることがあります。ひよつとしたらそうなのかもしれない。何が異なつていて何が同じなのか、ということを見つけて

いく努力が必要ですね。

共通の部分があれば、それをコモンモラリティとしてくるかどうか。私はくる必要はないと思えます。私は、コモンモラリティというテーマを与えられながら、非常にネガティブなことを言っています。皆さんに考えていただくひとつの問題提起として、そういう問いを投げかけてみた次第です。

水野…私はカウンセラーとして仕事をしています。その時に一番注意するのは、自分の道徳とか自分の価値観とか、自分がしたいことをクライアントに押し付けてはいけないということで、その点にとつても配慮しているわけです。

道徳という名のもとで、私たちが人に押し付けていることはたくさんあるわけです。元気のない人がいれば、元気になつて一生懸命会社で働けたらいいだろうなと私は思いますから、クライアントにそのように申しますと、それが過ちであるということがあるわけですね。その人は別の生き方もできる人であるということなのですが、私たちが思っていることが、必ずしもそうならないということはいっぱいある。

そういう意味で、世の中には「よりよい道徳」というのはありますが、「よい道徳」だけで推し進めようとする、やはり大きな問題が生じると思えます。従つていろいろな性質の道徳、いろいろな種類の道徳を併せもつていく必要があるのではないかと時々考えます。本当にいい社会という

のはまず存在しないだろうし、そのあたりも非常に難しいと思います。

コモンモラリティというのは、実は世の中には悪もありますが、よりよい善を選択する方法を研究することである。そういう考え方でいいのではないかと思います。けれども、実際は非常に難しく、よりよい善はコンフリクトを経験して苦しみの中から見出していくものであって、単純明解にはならないだろうというのが、私の学問からの意見です。明解にしたいという人からすると、「この人、何言ってるんだ」と言われます。心理学者はいつもそういう風にいじめられる訳ですけども、以上でやめておきます。

井出…私はこのコモンモラリティという言葉をも、廣池千九郎先生の求めたコモンモラリティが何だったのかという視点から考えています。従ってそれは、結論を言ってしまうえば慈悲寛大自己反省ですけれども、それが廣池千九郎先生の提示したコモンモラリティの一番核心である。すべてのものを寛大に受け入れる、あらゆる文化を受け入れていく、あらゆる神を受け入れていく、そしてそれらに共通するひとつのコモンなものを捉えようとする。その場合、問題はその内容ですね。何が慈悲寛大自己反省なのか。廣池（千九郎）先生の場合は、その意味内容をさらに具体的に格言として展開していくわけです。ですから共通なもの、コモンなものの中身を具体的に展開していくプロセスが、これから我々にも課せられるのではないかと思います。

従ってコモンモラリティという言葉に引き寄せて言うなら、いろんな文化があるとしても、それらをすべて慈悲寛大に受け入れていくような、そんな精神が廣池千九郎先生の求めたコモンなもの、共通の道徳ではないかと思えます。

欠端…私は歴史的な観点から、いろいろな文化の出会いの中で共通なものとして双方に承認されたものが、コモンモラリティではないかと思えます。双方が承認しない間も、それぞれの違いを多様なものとして、存続を許す、そういうような態度が必要ではないかと思えます。十二月にアジアのある少数民族の村を見学してきましたが、それまで非常に古い文化を保存してきた村の伝統的の家屋が、ねこそぎ全部なぎ倒されていました。それで鉄筋コンクリートの家をこれから造るということでした。そういうことは絶対いけないと思えますね。

どんな文化であれ、その文化の価値というものを見つめる努力をしないといけないと思えます。こっちは普遍性があるが、おまえ達の文化には普遍性がないといって、それをなぎ倒すというような態度は絶対いけない。双方が共通するものを確認するまでは、多様な形、多様な価値観の存在を認めるべきだと考えています。

鈴木（司会）…それではフロアの皆さんの方から、ご意見とかご質問を承ろうと思えます。先ほどご質問の中で「コモンモラリティとしての最高道徳」ではなくて、「コモンモラリティと最高道徳」ではないかとおっしゃった岸さん、今までの議論を聞いてどんな風にお感じになったか、一言コメ

ントをお願いしてよろしいでしょうか。

K氏：パネリストのコモンモラリティの定義について聞いておきますと、それは世界共通の道徳であるというような説明ではなかったかと私は解釈しました。その中でより高度なモラルというものを求める時に、はたして我々が学んでいる、モラロジーで学んでいる最高道徳というものが、いわゆるコモンモラリティとして成り立つのだろうかという心配があります。世界でという前に、我々はまず、もともと日本の中で最高道徳が認知され受け入れられる必要があるのではないかという気持ちがあるものですから、先ほどそういう質問をいたしました。

M氏：コモンモラリティと宗教との関わりについて、永安先生と井出先生に、是非お聞きしたいことがあります。中世までは宗教の社会でしたが、それに反発する形でルネッサンス以来出てきたのが科学です。ところが、宗教は永遠性を探求し続けてきましたが、近代科学はその問題を避けて、何か目の前の事象だけに関わっている。それに対して廣池（千九郎）先生は、新科学を樹立して、人類の生存・発達・安心・平和・幸福というような永遠性の問題を正面に据えたモラルを説かれたように思います。だから、永遠性の問題をこれからのコモンモラリティの中へどのように織り込んでいくのか。永遠性とコモンモラリティとの関係について、是非、お聞かせいただきたいと思えます。

永安：永遠と言った時に生命全体の永遠と、人類という生命の永遠とがあり、個人のレベルで言う魂の永続というようなことになってくると思いますが、それは従来ほとんど宗教が説いてきたわけですね。科学はそれについてはつきりしたことは言えないから、あるいは言えないだけであって、否定も肯定もしないということだと思います。

それから人類全体、あるいはもう少し小さい国民というようなグループの永遠性ということになると、それは人類社会の永続とか、国家の永続ということになると思います。人類社会の永続ということについては、地球環境とのからみで、むしろ今日の方が持続的発展というような考え方を創り出してきています。国連などでもそういう哲学をもとにして動いていますから、むしろかつての宗教よりも、地球全体の永続についてしっかり考えるようになってきている、進歩してきていると言えるのではないのでしょうか。

井出：廣池千九郎先生が永遠というものを考える時に、たとえばある宗教の教義や教団のあり方に注目するのではなくて、その宗教の始祖といわれる人たちの「人格における永遠の生命」といったものに注目しているような気がします。

そういったところに注目した場合に、いろいろな教団にさまざまな始祖といわれる人がいて、その人格の中に永遠の普遍性を見出すことができるというような立場から、永遠性というものをあらためて考えてみたい気がします。枝葉の教義になりますと、かなり対立したり相反するものになる

と思いますが、諸宗教の始祖といわれる人々が普遍的なものをどう見出したのということに注目すると、その見方にはまだ欠けているところがある、不十分ではないかという気がします。

鈴木・司会が発言してはどうかと思いますが、今のコモンモラリティと宗教的なものとの関連についてのご質問を聞いて思いましたのは、現代の人権尊重の思想に関することです。人権尊重はもうすでに世界のコモンモラリティの一部、重要な一部を成していると思えますが、元来それは、神の前における人間の平等ということに淵源があるといえますか、そのあたりから発生してきているといえる。人権尊重というのは、神に対する信仰心があって出てきた思想だと思えますが、コモンモラリティになった段階では、特定の信仰の背景はなくて、信仰を持つている人も信仰を持ってない人もいっしょに守ることのできるモラリティになっているわけですね。

特定の信仰を背景に持った思想も、コモンモラリティになった時には、別の信仰を持った人に対しても、あるいは神を信じていない人に対しても、受け入れられるようなモラリティになっていくということではないのか。私は基本的人権尊重の思想を見ますと、そういうことが言えるのではないかと感じました。

M氏…最高道徳はいわゆる永遠の安心を希求するものですが、そういう永遠性の問題も、これからどんどんコモンモラリティの中へ入り込んでくると見てもいいわけですね。

鈴木…永遠を重んずる立場からも、コモンモラリティに対していろいろ提言をしていって、人々が納得して共通なものとして受け入れて下されば、それはコモンモラリティになっていくだろうと思います。納得して下さらなければコモンにならないだけの話ですね。先ほど梅田パネリストが、最高道徳が普遍的だといっても、それは私達がそう思っているだけであって、実際に開発・救済活動をしてみて、多くの人が納得して受け入れて下さってはじめて普遍的なものになっていくとおっしゃいましたが、それも同じことではないかと思えます。

岩佐…新しい観点から発言してよろしいでしょうか。道徳科学研究センターの岩佐です。私はこのコモンモラリティということが一昨年の道徳科学研究センター・ゼミ（毎年夏期に開催される研究センター内の研究会）でテーマとして取り上げられた時から戸惑いを感じておりました。コモンモラリティというのは一体何だろうか。はたして我々はその意味を明確にしたうえでその中身を追求しようとしているのだろうか。もしみんなが、それぞれ違った思い込みをもってコモンモラリティという言葉を使っているとすれば、どれだけ議論をしてもなかなか生産的なものにならないんじゃないかという疑問です。そして昨年の「モラルサイエンス国際会議」の時にも、そこらあたりがどうもはつきりしていないなと思ったものですから、会議の最後にそういった趣旨の問題提起をさせていただきました。

その点で、先ほど配られたプリントに触れてみたいと思います。これは、昨年の国際会議最終日

のパネル・ディスカッション「これからの人類社会とコモンモラリティ」で、コメンテーターを務められたピーチャム先生の発言要旨に関するプリント(注2)ですが、ピーチャム先生は、コモンモラリティには四つの意味あるいはタイプがある、つまり、それは四つの違う意味で使われていると発言されました。我々はそのような意味でコモンモラリティという言葉を使っているのかを明らかにした上でなければ、議論はかみ合わないわけです。そこで、私達がコモンモラリティという場合、それは一番目の「共通道德として事実存在している道德 (existing common morality)」の「よ」なのか、二番目の「今は存在しないが将来共通道德となることが期待されている道德 (aspirations for increased morality held in common)」なのか、あるいは三番目の「(実践されているものではなく)理念として共通に存在する道德 (moral ideals held in common)」なのか、よびに四番目の「倫理学など道德理論において一体化しつつある原理 (conversing principles in moral theory)」なのかということをはっきりさせた上でなければ、緻密な議論を展開し、合意に達して新しい見地を開いていくことはできないと思います。

ちなみに、北川センター長の解説(注3)の中では、このコモンモラリティの四つの意味・タイプを、コモンモラリティが形成される四つのプロセスと解釈されています。しかし私は、コモンモラリティという言葉が四つの異なる意味合いで使われるということと、その四つはコモンモラリティが順次形成されていくそのプロセスを表しているということとは全く意味が違うと思います。

そこで、それぞれの方がコモンモラリティという言葉それぞれ違った意味で使っているわけですから、我々も意味の使い分けを区別しなければいけないと思います。たとえば、ピーチャム先生のコモンモラリティの意味の分類に従うとして、仮に、二番目の、aspirations for increased morality held in common、つまり共通に尊重される道德の増加・拡大が求められており、それを追求しなければならぬ、という視点に立った議論は大いに意味があると思います。つまり、今世界の現実を見ると、道德として共通に尊重され拠り所となっているものが極めて少ないと、これからは人類社会において共通に尊重される道德の領域を広げていかなければならぬし、それが重要なんだと。我々も、コモンモラリティという言葉をそういう意味で使うことはできると思うんです。いいかえれば、事実として、コモンモラリティとはこれこれの内容であるというんじゃないか、アスピレーション、そういうものが欲しいというか、なきやいけないし、もつと広がっていかなきやいけないというふうに考えてコモンモラリティという言葉を使った議論をすることができると思うんです。しかしその中身は何かということになると、我々も案外わかっていないし、こうした場ですの中身に関する議論が積み重ねられたことはほとんどないんじゃないかと思うのです。

結局、先程梅田パネリストも言われたように、中身の議論はなかなかできていないと思います。一昨年の道德科学研究センター・ゼミ「コモンモラリティの探求——文明の衝突を超える——」以来、このコモンモラリティについて、概念の区別の問題ではなく、その中身をどこまで事実として議論してきたのでしょうか。そこらあたりのことが十分に議論できていないのは、それぞれ思い込みでコモンモラリティという言葉を使っていることからくる混乱が大きいからなのではないかなと

思っております。私はまだ一昨年以来のそういう疑問が解けておりません。私の視点からすれば、コモンモラリティという曖昧な言葉を使うためにかえって我々の議論は混乱を来しているのではないか、とさえ思われるのです。ここは大いに議論する場ということで、私を感じてきた問題点について率直に述べさせていただきます。違うご意見がありましたら是非お聞かせいただければと思っております。

鈴木・司会をおおせつかりました私も、それと同じようなことを感じておりましたので、ピーチャム先生のご提言を資料にして皆さんにお配りしたわけです。このパネルに上がっている五人の皆さんと事前に打合せをしましたが、次のことを確認しました。今日世界のグローバル化がどんどん進展して、お互いが共有できるコモンモラリティが必要だということについてはみんなが合意している。その上で、コモンモラリティの探求に最高道徳がどういう寄与ができるかということができるだけ積極的に考えていこう。ある意味で概念をきちっと押さえることも大事ですけれども、辞書的な言葉の詮索よりも、コモンモラリティの形成に最高道徳からどのような貢献ができるかを考えていこうという提案がありました。

それと同時に、このコモンモラリティの意味に関する資料についても、この全体討論の時間の中で、いつこれに触れようかタイミングをはかっておりましたところ、たまたま岩佐さんがとりあげて下さいました。去年のモラルサイエンス国際会議の最終日（八月九日）にパネル・ディスカッション

ヨンが行われました。ピーチャム先生はコメンテーターとして、国際会議での発表や議論を聞いていて、論点の交通整理が必要だと感じられ、コモンモラリティには四つの意味がある、あるいは四つのタイプがあるというコメントをされたわけです。

北川センター長が、国際会議の報告文を去年の「まなびとびあ」九月一日号に掲載していますが、その中で、ピーチャム先生のコメントについて独自の解釈をしています。それではここで、コモンモラリティの四つの意味について、北川センター長はどんなふうを受け止められたのか、お聞きしたいと思います。

北川・発言の機会を与えていただき、有難うございます。昨夏の国際会議のテーマは「グローバル時代のコモンモラリティの探求」でしたが、人類社会に必要なコモンモラリティの探求というテーマに魅力を感じて、海外からも多くの方々が参加して下さいましたが、実にさまざま立場からの発表や発言がありました。それらを大きく分ければ、比較文明や宗教多元主義(注4)という文明や宗教の立場からのご提言、そしてもう一つは科学の立場や専門職倫理の立場、あるいは世俗道徳の立場からのご提言と、大きく二つの立場に分かれたのではないかと思います。このようにさまざまな立場から提案や問題提起がなされたものですから、最後の討論の場で、コメンテーターとしてピーチャム先生が、議論を整理する意味で、岩佐先生がおっしゃるように、コモンモラリティについて考えるためには四つの意味あるいはタイプを区別すべきだと提案されたのだと、私も理解しております。



比較文明や宗教多元主義の立場からは、どちらかという三番目、四番目の次元での提言や発言が多かったと思いますし、科学や専門職倫理、あるいは世俗道徳の立場からは、一番目、二番目の次元での提言や発言が中心だったのではないかと思います。つまりこの立場は、特定の宗教的な信仰や思想・信条を前提にしないで、たとえば専門職としてのお医者さんの間で共通に確認されている倫理、共通に確認すべき倫理としての生命医学倫理をはじめ、情報倫理、企業倫理、市民倫理などにコモンモラリティの具体的なあり方を見出すものであったと思うわけです。そういう意味では、岩佐先生がおっしゃるように、ピーチャム先生の提案は、コモンモラリティにはいろんな意味やタイプがあるということの整理だったと思います。

ただ私は、国際会議の報告文をまとめる段階で、ピーチャム先生も、コモンモラリティの四つの意味やタイプは相互に相容れないものではなくて、共存可能なものであるという発言をされたことに注目しました。つまりコモンモラリティには、一から四までいろいろな意味やタイプがあるけれども、それらはお互いに排除し合う見解の相違ではなく、相互に對話が可能であって、相互間の對話を促していくことによって、コモンモラリティの内容がより増大していく、そういう意味づけも可能ではないかと解釈したのです。

私としては、未来に向けてコモンモラリティを創造していくためには、まず一番目の既存のモラリティ、たとえばある専門領域における既存のコモンモラリティを手がかりとして出発し、二番目に、それをさらに共有化された道徳、たとえば生命医学倫理以外の他の専門領域における倫理とも共通するコモンモラリティを探索し、その増大を図っていきたいという願望が起こる。また三番目に、今度は道徳理想の共有化を図る。これは必ずしも科学的な実証的な立場ではなくても、こういうコモンモラリティが必要だという理想の探求です。そして四番目に、それがさらに一つの道徳原理や道徳理論へと収斂されていくような、そういうレベルのコモンモラリティもあるということだろうと思うのです。この解釈が成り立つとすれば、最高道徳論などは、この四番目のレベルに近いのではないかと思うわけです。

この四つのプロセスの周期的な積み重ねによって、さらに新たなコモンモラリティの創造が可能になるのではないか。このプロセスの中で、先ほど述べました二つの立場が相互に對話を積み重ねながら、あるいは四つのレベルが相互に影響し合いながら、未来社会のコモンモラリティの創造に重要な役割を果たしていくことになるのではないのでしょうか。こんな解釈に立って、最高道徳論が四番目のレベルに位置づけられるとしても、一番目、二番目のレベルの倫理道徳と大いに對話を試み、最高道徳論を実際の生命倫理や専門職倫理の場でのように応用し展開していったらよいのかというようなことが、我々の課題となってくるのではないのか。今回の国際会議では、この大きな宿題をいただいたのではないかと思います。ピーチャム先生の提案を、私としてはこのように受け止めた次第です。

鈴木…この点と関連して、何か皆様の方からご意見とかご質問とかございますでしょうか。

一氏…私は、モラロジーの研究はいたって浅いものですから、いろいろお話をお聞きして、「コモンモラリティっていったい何だろう。そう呼ばれるような中身があるのかな」など、戸惑いや疑問を感じました。少しわかったような気もしますが、日本の伝統文化を大事にするなら、なぜ日本語で言わないのかと私は言いたいです。頭が古いものですから、昔からある日本語の最高道徳という言葉が素晴らしいと思っていたものですから、何かそれが消えてしまうのではないかと心配になりました。モラロジーの学習に仲間をお誘いする努力をしていますが、「モラロジーって何？」という質問に対しては、「最高道徳、道徳の上のもっと素晴らしい道徳なのよ」と、説明しています。これからはコモンモラリティという言葉を使わなければならないとしたら、私自身がごちゃごちゃになってしまいそうな気がします。

鈴木…コモンモラリティを日本語で言えばどうということなのかについて、永安先生にお尋ねしようと思います。その前にご発言の中の表現に、私としては気になることがあります。「モラロジーとは何か」と問われた時に、「それは最高道徳ですよ」というのは、ちょっと違うのではないのでしょうか。

モラロジーを翻訳しますと道徳科学となり、学問の名前です。最高道徳を英語にしますと、シェープリーム・モラリティになります。モラロジーと最高道徳は違います。両者はつながっていますけれども、その違いのところをご確認いただきたいのです。よろしくお願いします。

それでは永安先生、コモンモラリティの翻訳をお願いします。

永安…コモンモラリティは日本語では、「共有道徳」とか「共通道徳」と言えばいいのではないですか。どの家にも居間がありますよね。家族がそれぞれ自分の個室から出てきて、居間で、みんなでおしゃべりしたり、テレビを見たりする。コモンとはそういう広場です。コモンというのは、いわば公園です。共通の空間、共通の道路、共通の設備、共通の空気、共通の文化です。誰もが利用できるもの、誰もがそこに出会う場、それくらいに理解しておけばいいのではないですか。

そういうものの中にも高低いろんなレベルがある。価値の低いものもあるし、普通のものもあるし、高いものもある。その中の最高の価値を目指すものが一つが、モラロジーという「最高道徳」ではないか。これがコモンモラリティとしての、つまり共通の道徳としての最高道徳なのです。だから最高道徳というものがあって、これを共通道徳という広場に持ち出しましょう、あるいはすでにそれ自体がかなり共通の道徳になっていますよと、そんな理解でよいのではないのでしょうか。いかがでしょうか。

鈴木…一応訳としては共通道徳、あるいは共有道徳、共有されている道徳、ということですね。

永安…ピーチャムさんは、全く違った四つのモラルがあるとは、全然言っていない。コモンモラリ

ティというものが確かにあると考えている。それが現にある程度すでに存在するというのが、イグジステイング・コモンモラリティですね。それからモラリティ・ヘルド・イン・コモンは「共有の道徳」という意味ですね。コモンモラリティと同じことです。それがだんだん増えています（インクリースト）よ、増えることを希望します（アスピレーションズ）よ、と言っているのです。それからモラル・アイディアルズは、道徳の理想、目指すべき価値ということで、人々が共通に持っている道徳的な理想や価値がありますよ、ということですよ。それからコンバージング・プリンシプルズ・イン・モラル・セオリーのところですが、これは、ひとつの道徳についての体系的な考え方・原理（プリンシプル）があつて、その原理はたくさんあるようだけれども、比較的はつきりした少数のものがあつて、道徳理論（モラル・セオリー）にまとまつてきている（コンバージング）よと、こういう次第ですね。

鈴木：共有されていれば、それがコモンモラリティになるのですね。

永安：そうですね。先ほど内容のない議論が行われているというご発言がありました。すでにコモンモラリティの具体的な内容例は実際たくさんあるのです。例えばインフォームド・コンセントというのは、一般に大した価値のあるものではないのではないかと言われるかもしれませんが、そもそもそれはインフォームド・コンセントということについての理解が足りない方の意見だと思

います。インフォームド・コンセントというのは、最高道徳の重要な内容になります。慈悲の内容になります。そういうことが理解できないというのは、石頭になっていて、最高道徳という自我没却の頭ではないのではないのでしょうか。私たちは、現実を見て物事を柔軟に考えていく必要があります。そうしますと、コモンモラリティの内容例はたくさん見えてきます。

例えば、「会ったら握手しましょう」といいます。これもその行動だけを見るのではなくて、そこに込められた心に注目してみますと、「ああ、あなたと会えてよかった。私はピストルを使いませんよ。だから利き腕の方で握手しますよ」というわけです。昔武士が刀を取りにくい左側に置いたというのと同じ意味の礼儀作法です。そのほかにも内容例はたくさんあります。

例えばWTOというあの膨大な国際条約を考えますと、ここには自由世界に向っているいろいろな国々の、あるいは人々の間の取引を促進していきましようという、大変な哲学が入っています。道徳が入っています。ですからコモンモラリティというのは、インクリーシング（increasing）で、どんどんでき上がってきている。増大してきている。それから古来のキリスト教世界ですと、キリスト教の考え方とそれに基づいた道徳が、共通道徳として厳然としてあるわけです。広い範囲において、おそらく何十億という人がその影響を受けてきていると思います。

ですから「共通」あるいは「共有」という言葉を出したから理解しにくいとお考えにならないで、今日は全部の人類が共通の道徳の場に出会うようになってきている、というくらい理解を、これからしていったらどうでしょう。

鈴木…共通と言うからには、違った背景を持つ人がその道徳についてはお互いに理解、共有できるということですか。さつき例としてあげられたところでは、日本と韓国の人達とは文化的背景が違うけれども、一定の道徳については、両方の人が「確かにそうだね」とお互いに納得して、共通の土俵の上でいっしょに生活できるという、それがコモンモラリティかなと思います。永安先生は、そのコモンモラリティにはベーシックなものから高いレベルのものまであるとおっしゃいますが、やはり共有できるものは、どちらかというところとベーシックなものから順々に蓄積されていくのではないかと思います。

永安…それは誤解ですよ。

鈴木…あまり高いレベルのものをいっしょに共有するのは、なかなか難しい点があるのではないのでしょうか。

永安…必ずしもそうではないと思います。

鈴木…一つの例を申し上げます。前回の国際会議では、コモンモラリティについてみんな話し合うための土俵作りをし、その土俵の中で最高道徳も一つのコモンモラリティの候補として皆さんに

紹介するということを、我々は分担してやったわけです。

その中で私も一コマ担当させていただいて、廣池千九郎先生の宗教に関わるお考えを紹介しました。廣池（千九郎）先生は、道徳は大事だけれどもその根底に神に対する信仰心がどうしても必要で、それがあって初めて道徳はしっかりしたものになりうるとおっしゃっています。したがってコモンモラリティにも、宗派は問わないけれども、神に対する信仰心が根底に必要なのではないかと申し上げて、廣池（千九郎）先生の考え方の一端を紹介しました。

そこで神に対する信仰心をコモンのモラリティの一つとして打ち出そうと提言しましたら、ピーチャム先生がそれは無理だと反論されました。コモンモラリティをいっしょに考えるためには、カトリックの人もいればイスラムの人もいれば無神論者もいて、その人たちがいっしょに共有できるものを作っていくなくてはならないのだから、最初から道徳の根底に宗教が、神に対する信仰心が必要だという立場を押し出してくるのは、その場を壊してしまうことになる、レベルの高い内容を押し込もうとしていると、ピーチャム先生はおっしゃいました。

私は、一応廣池（千九郎）先生の基本的な立場を説明しましたが、コモンモラリティを考えていく上では、ピーチャム先生がおっしゃることはもつともだとも思えたわけです。

永安…この会場での空気は、いつのまにか、神に対する信仰を持つのがより高いレベルで、持たないのはより低いレベルだという価値の序列付けをやっているのではないのでしょうか。

私は、そうは思わない。神に対する信仰とか仏に対する信仰というものを持たざるをえない、そういうしないと精神の安定あるいは方向づけができないというのは、低い精神なのかもしれない。それはちょうどおまじないをしないと気持ちが悪まらないという時代があったのと同じで、科学の立場からみて、それはレベルが低いとみる見方もあります。それは別として、我々はすぐ無前提に、あまり検討しないで神仏の心とか何とか言えば、価値が高いことを表現しているかのように思い込んでいるのかも知れません。その点はどうですか。

鈴木：私は、基本的には神に対する信仰心を持つというのは、レベルの高いことだと思っています。大事なことだと思っています。

O氏：せっかく分かりやすい話になりかけていたのに、また難しい議論になっていくような気がします。私は高知で国際交流をやっていますが、そういう機会に微笑みを交わすとか、挨拶をするとか、歌をいっしょに歌うとか、そういう共通のものを通して、いつも素晴らしい交流の場を体験させてもらっています。また麗澤大学の留学生をホームステイに受け入れています。ここでは文化的背景の違う者が集まって仲良くやってくることができる。これこそコモンモラリティであると思います。

宗教の話も出ましたけれども、留学生に我々が仏壇の前で祈りを捧げるのを見せる。そしてこれからのあなたの幸せを祈るといふ話をする、宗教が違っても分かるわけです。そういうことか。つのコモンモラリティではないだろうか。

また廣池千九郎先生が、訪問客が疲れて到着した場合には、「まずお休み下さい」と声をかけ、ふとんを敷いて休んでいただいたという話を聞いていますが、こういうことは、どこの世界でも共通して理解できるモラリティだと考えられます。世界の常識と言ってもいい気がいたします。平和実現が目的であれば、コモンモラリティとしては、それで充分ではないか。

今後さらにいわゆる最高道徳、シユープリーム・モラリティの領域に進んでいくと、個人の安心とか永遠の平和というものを含めて考えていかなければならないでしょうけれども、今の段階では、平和の実現を目的とするものがコモンモラリティではないかと考えて、微笑みを交わすというようなことが大事ではないかと思っています。いかがでしょうか。

S氏：この研究会には十年ぶりくらいに参りました。関心をもって聞いていました。私は、日頃は田舎の方に引っ込んでおきまして、「まなびとびあ」などを見て、モラロジー研究所が国際的にも広く活躍しているような感じを受けていますが、実際は何をやっているのかという疑問も感じているところですよ。

今日のお話を聞いて感じるのですが、世界が狭くなっていろいろな人と交流できるようになると、私たちは国柄の違い、法律の違い、習慣の違いなどに日常的に出会うようになったということ

です。また文明が発達するほど法律が複雑化して、知らないでは済まないことがたくさん出てきます。たとえば政治資金に関する法律でも、それは知らなかったと言っても罪になることがいっぱいあります。また世代が違えば、考え方など、いろんなことが違ってきます。

性別についても、感覚的に男性の脳と女性の脳が違うということを、いくら説得してもわからない分野がたくさんありますし、職業によっても違います。お互いがそういう違いをすべて乗り越えていくことが大切です。結局、愛を実現し安心平和な世界を創るには、お互いに理解し合う相互理解が必要で、そのために、さつきから分かりにくいと言われているコモンモラリティというような英語も必要なのではないかと、私は思います。

私たちの学んでいる道德実行の九つの条件、道德を実行する上での注意事項は、今後ますます重要になってくると思います。たとえばいくら心使いがよくても、時代・時・場所・場合がよくなければ、さつき水野パネリストが言われたように、善をしたつもりが悪になったり、どこまでが善なのか、どこまでがおせっかいなのかわからないような、非常に難しい世界に、いま私たちは生きています。

コモンモラリティといっても、私たちのモラロジーの活動とは関係がないものというような認識が持たれそうですけれども、実は、少なくともモラロジーを説くとか、皆さんにお勧めする立場の人は、そういう違いと共通性をしっかり認識していかなかったら、相互理解とか、共感とか、受容とか言っても、それは言葉だけで、本当は理解できてないことになります。感情的な理解もさるこ

とながら、理性的に足元のところで理解していかなければいけないことがたくさんあると思います。たとえば宗教的な信念だけで行動するのではなく、その国の法律はこういくなっているのだから、それを踏まえて行動しなければいけないというような理解から入っていかないといけない。

これから私たちが勉強していったり、モラロジーを皆さんにお伝えしたりする場合には、具体的な判断や行動が不可欠になります。私は一〇年前から言っているんですけど、とかくモラロジーの教育活動の現場では、具体的な方法をないがしろにして精神論でいきがちです。たとえば至誠がなければうまくいかないと言いますが、その至誠を行動に移したら、具体的にどのようない行動になるのかというところをよく考えなくてはなりません。ところが、ただただ至誠を強調して、方法論は何かレベルの低いもののように、いまだに捉えられているような観があります。

私たちはこれからもっともっと道德を普遍的にしていかなければなりません。そのためには、このコモンモラリティの中身をもう少し具体的に議論するという認識を私たちが持つていかなないと、本当の意味でモラロジーを広めていく、最高道德を実行していくことは難しいと思います。これからはモラロジーを学ぶ人の中に、専門的なものを持った人が増えていかなければいけないし、あるいは専門の人達とのネットワークを作っていかなければいけない時代にきているのではないかと思います。

これから私たちは、お互いにまず国柄や世代や性別や職業や地域の違いを知って、それからそれを認めて理解して共感していく。そこで初めて道德の実行ができるのではないかと思います。い

かがでしょうか。

鈴木…基本的には、コモンモラリティという言葉を使っているいろいろ考えていくことを肯定して下さったわけですね。

S氏…あまり話が抽象論的になりすぎるようだけど、実はいろんなことを知っておかないと、下手に人を指導することもできない。そういう世界に今入ってきつつある、そういう時代が来ていると思っっています。

鈴木…今日の発表でもいろいろご紹介いただきましたが、明日の午後の発表でも、それぞれの専門分野における最近の動向を踏まえてご提言いただけたらと思います。

W氏…私たちは、いろんな政治的・社会的問題についても勉強し、皆さんにお伝えしていかなければならない立場にあると思います。つい最近、靖国神社にお参りしました。政教分離というような問題もありますが、そういう質問を受けましたら、どのように説明して納得していただいたらよいのか、井出先生にお教え願いたいと思います。

井出…廣池（千九郎）先生の言葉の中にもありましたように、人間の感情を尊重したいと思います。国民感情としてはどうなのか。それを前提として踏まえていくことが、これから国際社会に通用していく要素だという指摘があったと思います。

したがって、もしそれが国民としての感情の発露ならば、それもしつかり認めていくというのが、モラロジーの立場ではないか。その立場を納得していただけるかどうかは、また別の問題だと思うんですけど、少なくともそういうことを廣池（千九郎）先生の場合でしたら認めるというか、むしろ賛成されるのではないかと思います。しかしそれも、もし人に強要したりすると、また別の問題が出てくると思うのですが。私はそう考えます。

W氏…全てを肯定するとか、いわゆる他を否定しないという立場から、いかがですか。

井出…まさに寛大な日本人的な発想からすれば、そういう行動をとった人もあえて認めていこう、理解していこうということが言えるのではないかと思います。

永安…我々モラロジー団体では、普遍的道徳という言葉をずいぶん使ってきた。皆さん方もお使いになったと思いますが、普遍的とはどういう意味か、つつこんで説明しないで使ってきたのではないのでしょうか。それについて説明した文章を、私は見たことがありません。説明された講師にもお

会いたことがあります。どうもそれだけでは困るのではないのでしょうか。そこで特殊、普遍、共通という、昔からのきちっとした哲学の概念を踏まえて、外国の人たちと現実の道徳のことを議論しておりますと、やはりそこに共通の分野が出てきている。

そういうところをもっとお互いつきかためて考え、広げていったらどうか、それがそもそもコモンという言葉を出したきっかけです。この言葉には、すでに長い歴史がありますけど、今日は議論の始まりとして、コモンという言葉はお釈迦様の手の平みたいなものだといいるところから出発してみたらいかがでしょうか。我々はどんな議論をしましても、所詮孫悟空にすぎないので、その手の平から抜け出せない。コモンとは、そういう手の平のような意味を持っている概念、考え方は。共有、共通というのは、もしもそれがなくなったら戦争するしかなくなる。ですから神々の争いにならないで、共存するためには絶対必要な手の平であると、私は思っております。

梅田：先ほど最後に発言された方がおっしゃったことに、私は非常に共感するところが多かったです。異文化とつきあう方法については、たとえば、挨拶をしたり、握手をしたりということは、基本的に最高道徳の原理、モラロジーの教えの中に含まれていると、私は思います。しかしあえてそれだけを取り出して、それがコモンモラリティだという必要性はないと思います。最高道徳を他の人にわかってもらうには、承認とか納得、共通なものの確認、異文化の理解というような一種の合意形成の手続きが大事なんです。ところがこれまで、それがはつきりしていない。

先ほど、至誠を強調して、方法論を軽視しているというご指摘がありましたけれども、まさに私も、手続き、人に分かってもらうための方法論を、今まで十分考えてこなかったのではないかと思えます。非常に陳腐な結論で恐縮ですが、異文化の人、異なった宗教の人の間でコミュニケーションを促進していく。そこにはじめて、共存、共栄とか、相互理解ということができ上がってくるのではないかと感じました。

水野：コモンという意味は二つ、英語で言いますと、「普通の」と言う意味と、「共通の」という意味がありますが、そういう意味では、共通に信じているより質の高い道徳が普通の人に共有されれば一番いいわけです。しかし現実的に世界を見ますと、道徳と道徳のぶつかり合いによって争いが起きていますし、私たちの日常生活も実は悪との戦いよりも、道徳と道徳のぶつかり合いの方が、厄介な問題を孕んでいる。

泥棒している人にも、盗むことを正当化したり、自己主張があります。道徳と道徳のぶつかり合いを解決するには、より質の高い道徳を持つてくる以外に方法がないわけです。そうなった時に、コモンモラリティとして最高道徳は何を提言し、道徳と道徳のぶつかり合いの世界から、人類をより進化させることができるかという方法論が提示されていないということが、問題になってくるわけです。

コモンモラリティという言葉は、国際会議の開催とか、『道徳科学の論文』の英訳完成という流



れの中で、国際社会の中で最高道德をどう提供できるかということ、考え出された言葉です。いま世界中で共通に起きていることがいっぱいあります。技術もそうですね。国際問題だと思ってい  
たら、実は日常の問題だったりするわけです。そういう意味で、「コモンモラリティとしての最高  
道德」というふうに提言をさせてもらったわけです。実は議論しなければいけないことがいっぱい  
あります。

井出：私はコモンモラリティとしての慈悲寛大自己反省の精神というものを広げていくことによっ  
て、おそらくいろいろなものがそこに入ってくると思います。先ほどおっしゃったちよつとした握  
手にしても、その根底にあるものは何なのか。廣池（千九郎）先生はそれを求めたような気がする  
のです。ですからけつして抽象論ではなくて、何か腹の中にしっかり治めておくものを、モラロジ  
ーは提示できるのではないか。そしてそれを具体的にどう表現するかという方法は、その人の経験  
や知恵から出て来るものだと思います。廣池（千九郎）先生の言葉の中に、人と争ったのでは平和  
を説く資格はないというのがあります。ですから絶対に人と争わない理念とか精神とかを説き続け  
ることが、僕は可能ではないかという気がします。

欠端：一番最初に申し上げましたが、文化の出会いの中で共通なものとして双方が承認したもの、  
そういうものが多分コモンなものということだろうと思います。これは国家と国家、民族と民族と

いうような大きな次元、高い次元だけではなくて、個人と個人の間でも共通なもの相互承認が行  
われなければいけないと思います。たとえば関西の人と東北の人が出会っても、なかなかコモンな  
ものを築けない。それを築くには、一〇年、二〇年かかると思います。

やはりお互いに気長い努力が必要です。時にはいやなことがあっても、コモンなものを築き上げ  
るまでは、多様なあり方を承認する度量というものを、個人としても国家としても文化としても持  
っていききたいものだと思っております。

鈴木：ちょうど時間になりました。まだまだ終わりそうにありませんけれども、この後、懇親会食  
もありますので、またそちらで話しの続きはお願いしたいと思います。どうも皆さん、有難うござ  
いました。パネリストの皆さんも、有難うございました。

（注一）国連グローバル・コンパクト

一九九九年一月、世界経済フォーラムの場でコフィ・  
アナン国連事務総長が提唱した、国連諸機関と企業との  
間の新たなパートナーシップを構築することによってグ  
ローバリゼーションの弊害を克服しようとするひとつの  
新しい取り組み、運動である。国連諸機関が達成しよう  
としてきた地球的課題の解決に企業の資源を活用しよう  
とする壮大な計画であると言ってもよいであろう。具体

的には、企業には、人権の保護、結社の自由・団体交渉  
権の承認、児童労働・強制労働の禁止、差別禁止、環境  
保全、そのための技術開発奨励などの要素を含んだ九つ  
の原則を遵守することが求められる。この運動を支持す  
る企業は、国連事務総長宛に書簡を送ることによって、  
この運動に参加することになる。二〇〇三年三月現在、  
世界で六三〇社以上が参加を表明している。そのほか、

業界団体、研究機関、非政府組織（NGO）などを合わせると、八〇〇団体以上がこの運動に関わっている。

（注2） トム・ビーチャム

ジョージタウン大学教授、同ケネディ倫理研究所主任  
研究員

ビーチャム教授は、モラルサイエンス国際会議（第五日目、平成一四年八月九日（金））「これからの人類社会とコモンモラルリティ」というパネル・ディスカッションにコメンテーターとして参加された時に次の板書をされた。

#### Four Senses (or Types) of Common Morality

1. Existing Common Morality
2. Aspirations for Increased Morality held in common
3. Moral Ideals held in common
4. Converging Principles in Moral Theory

（注3）

上記の板書に対して北川治男道徳科学研究センター長の解釈は、コモンモラルリティの諸相の論考（二一九頁）にあります。

（注4） 宗教多元主義

モラルサイエンス国際会議で、間瀬啓允教授（東北公益文化大学）は宗教多元主義について次のように述べている。

「これからの宗教を考えるうえで重要なことは、宗教の自己解放／脱制度化、あるいは信仰の自己解放／脱教義化、ということではないだろうか。制度のなかの宗教から制度の外に出ていく宗教になろうとする。あるいは、教義に縛られた信仰を教義から解放していくこととする。そうすることが、これからの社会における宗教にとって、重要なことにあるのではないだろうか。」

このように宗教多元主義とは、それぞれの宗教が制度や教義を脱して、本来の信仰の姿になることにより、すべての宗教に共通する霊性や成熟した信仰をとりもどしていくことを主張している。